

映像視聴に見られる文化の影響 —ブラジル人学校での視聴調査と学習環境調査結果から—

塚本 美恵子

【要旨】 映像の時代といわれる現代では、映像が理解を促す教材として教育現場で広く活用されるようになった。映像はビジュアルイメージとしてそのまま記憶され则认为られている。しかし筆者が日米の子どもたちを対象に実施した視聴調査からは、見たままではなく文化の影響を受けたイメージが再構築されていることがわかった。本稿では、映像視聴に見られる文化の影響が日本に暮らす「外国につながる子どもたち」、中でも最も数の多い日系ブラジル人の子どもたちにも見られるのかを検討するために、視聴調査に加えて学習環境調査と保護者へのインタビューを実施して考察した。

【キーワード】 アニメ 映像理解 視聴調査 日本のブラジル人学校 小学生 比較研究

1. はじめに

映像は教育の場でも理解を促す教材や資料として多用されるようになった。テレビ番組や映像資料などの映像教材は、言葉や写真よりもはるかに分かりやすいといった教育効果や有用性も確かめられている。だが「見れば分かる」と考えられる映像も、捉え方や解釈は国や地域によって違うこともある。例えば太陽は地球上のどこから見ても同じ筈だが、日本の天気予報などでお馴染みの赤やオレンジ色の太陽は、アメリカでは yellow(黄色)になる。人は生まれ育つ場の文化を身につけながら成長することから、物の見方にも文化の影響が認められることが予想される。映像を教材として使用する際には、こうした学習者の背景文化への配慮も求められる。

近年、国際化・グローバル化に加えて労働力不足を補うために、多くの外国人労働者が就労するようになった。その結果、日本で働く外国人労働者の子どもたちの教育問題がさまざまな場で指摘され、政府もその対応をとりはじめた。本稿では、日本で育つ多様な文化背景をもった「世界につな

る子どもたち」の映像視聴に見られる文化の影響を実際の視聴調査から明らかにしていく。

本研究は当初、日本の児童に英語でアニメを視聴させる調査からスタートし(塚本ら 2010)、その後、アメリカの児童を対象に日本語版と英語版のアニメを視聴させる調査を繰り返してきた。調査対象者にはバイリンガルプログラムに籍を置く児童も含めたことから、言葉による回答が難しい場合は描画でも答えられるようにした。調査の結果、子どもたちは言葉がわからなくても予想以上に高い注視度で映像を視聴していることが明らかになり、映像は子どもたちの興味関心を引き付ける有効な教材であることが改めて確認された(塚本 2010)。また映像に現れる雪だるま(図1)を、2玉でなく図2のように3玉で描く児童が多く見られることがわかった(塚本 2011)。

そこで改めてアメリカの3つの小学校の日英バイリンガルプログラム導入校(A校)、スペイン語のイマージョンプログラム導入校(B校)、言語教育を実施していない特別な私立校(C校)の4年生のクラスで比較したところ、C校、B校、A校の順で3玉の雪だるまを描いた児童数が多く(塚



図1.『雪渡り』雪だるま ©ハリケーンフィルム



図2. アメリカ児童の描いた雪だるま

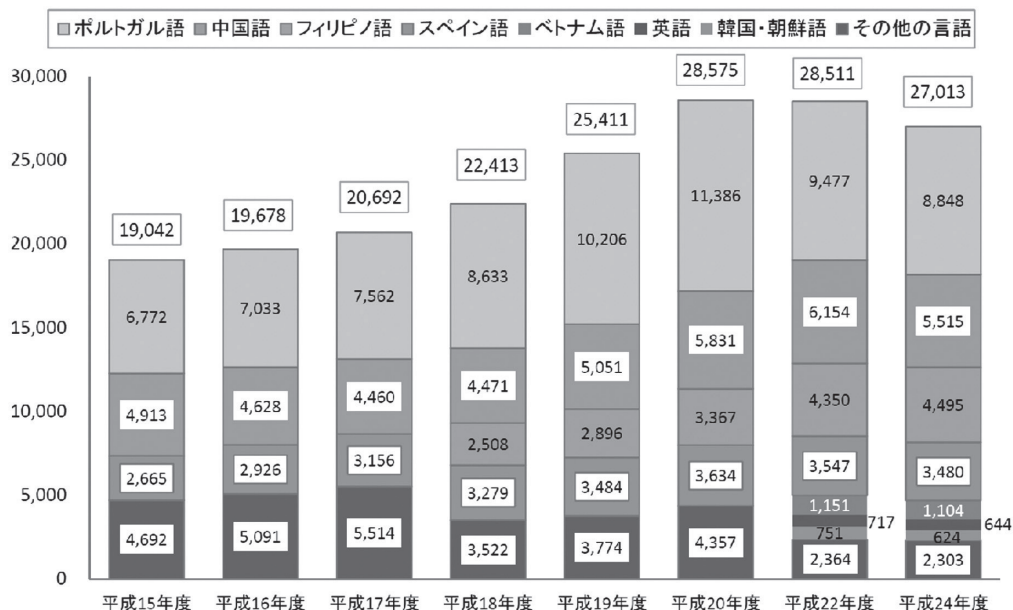
本2012a)、さらに4年生と5年生で比較したところ5年生よりも4年生の方が3玉に雪だるまを描いた児童が多かったことから、発達段階によっても変化することが示唆された(塚本2012b)。見てもいない3玉の雪だるまを子どもたちが描いた理由として考えられたのが、アメリカ文化の影響である。冬季、アメリカの低学年の教室の窓には雪の結晶と共に3玉の雪だるまが飾られていることも多いことから、こうした文化の影響を指摘した(塚本2013)。

一連の研究から、子どもたちは映像を見たまま記憶(記銘と保持)し、保持された記憶を引き出して「想起」「再生」するのではなく、育つ場の文化の影響を受けたイメージを再構成していることが分かった。そこで今回は、日本国内のブラジル人学校の協力を得て、「外国につながる子どもたち」にも文化の影響が見られるのかを検討すると同時に、子どもたちの文化的な生育環境を知るための学習環境調査と保護者へのインタビューも実施した。

2. 日本で学ぶ外国人児童生徒

法務省の「平成25年末現在における在留外国人数について」¹⁾によると、日本に滞在する中長期在留者は169万人、特別永住者は37万人で、合わせて206万人となっている。在留外国人数については、平成24年に出入国管理及び難民認定法等が改正されて新しい在留管理制度が導入されたことから従来の外国人登録者数とは単純に比較

表1「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成24年度)」³⁾



文部科学省資料より

できないが、ピークとなった平成 20 年の 221 万 7 千人の外国人登録者数（日本の総人口の 1.74%）より若干減少しているものの、日本の総人口 1 億 2,746 万人の 1.6% を占めるまでになっている。

国内に多く在籍する在留外国人も滞在が長期化すると、子どもを帯同したり呼び寄せたりするケースが増えている。だがこうした在留外国人の子どもたちの教育については特に法的規定がないため、日本の子どもたちのように日本の学校に就学する義務がなく、正確な人数も把握されていない。

文部科学省が平成 24 年に実施した学校基本調査によれば²⁾、全国の公立の小学校、中学校、高等学校等に在籍する外国人児童生徒数は約 7 万 2 千人で、学校別では小学校に約 4 万人、中学校に約 2 万 1 千人、高等学校に約 9 千人となっている。

表 1 に引用した「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査」³⁾を見ると、公立学校に在籍する在留外国人児童生徒のうち日本語指導が必要な子どもの数がわかる。平成 15 年から年々増加していた日本語指導が必要な児童数は、平成 20 年のリーマンショック以降落ち込みを見せるが、それでも平成 24 年には 2 万 7 千人となっている。子どもたちの母語別在籍状況を見ると、1 位がポルトガル語の 8,848 名、次いで中国語が 5,515 名、3 位がフィリピン語の 4,495 名、スペイン語が 3,480 名で、ベトナム語、英語、韓国語、その他の言語となっている。ポルトガル語の多くは日系ブラジル人の児童生徒で、日系 2 世 3 世の子どもたちである。そこで今回は、日本で学ぶ「外国につながる子どもたち」の中でも最も数の多い日系ブラジル人の子どもたちに焦点をあてて調査を実施した。

3. 日本にある外国人学校

日本に学齢期の外国人児童が通う学校は、公立学校だけではなく、外国人学校にも 3 万人程度の外国人の子どもが在籍しているといわれている。

外国人学校とは「主に在日外国人の子らの教育を母国語で行う学校で、学校教育法上の各種学校として都道府県が認可した学校から、無認可校までである」⁴⁾。外国人学校は、学校教育法第一条に基づく「一条校」、つまり文部科学省の定めるカリキュラムにしたがって授業を行う学校ではないことから、各種補助金や寄付控除等が受けられないなどのデメリットも多い。「各種学校」と位置付けられた外国人学校では、卒業しても日本国内では正式な義務教育を受けた、あるいは高等学校を卒業したと認定されないなどの問題や、通学定期券の割引適用外などの問題が指摘されていた。また 90 年代には各地に南米系の学校が民間教育施設（私塾）としてではじめたが、校地、校舎の自己所有などの基準を満たしておらず、私塾扱いとされてきた。日本にある「外国人学校」については、文部科学省では以下の様に定義している⁵⁾。

・外国人学校（インターナショナルスクールを含む）について、法令上特段の規定はないが、外国人学校は主に外国人児童生徒を対象とする教育施設を指し、そのうちインターナショナルスクールとは、主に英語により授業が行われ、外国人児童生徒を対象とする教育施設であると捉えられている。

・外国人学校に通っても就学義務の履行とは認められない。二重国籍者については、「家庭事情等から客観的に将来外国の国籍を選択する可能性が強いと認められ、かつ、他に教育を受ける機会が確保されていると認められる事由があるとき」には、保護者と十分協議の上、就学義務の猶予または免除を認めることができるとされている。（昭和 59 年文部省通知）

・外国人学校の一部には、国際的な評価団体（WASC, ECIS, ACSI 等）の認定を受けているもの（例：アメリカンスクール・イン・ジャパン）や、大学入学資格との関係では、本国において、日本の高等学校に相当する学校の課程と同等の課程を有するものとして位置付けられているもの（例：東京横浜独逸学園）もある。また、一部には、学校教育法第 83 条に基づく「各種学校」として都道府県知事の認可を受けているものもある。

外国人学校は、従来からある欧米系のインターナショナルスクールや中華系の学校、朝鮮半島出身者による在日コリアンの民族学校などに加え、インド人の子どものための学校や90年代には南米系の外国人学校も増加している。日本で最初のブラジル学校は1995年に愛知県豊田市で開校されたが⁶⁾、その数は2000年末には14校、2006年には90校と15年で20倍も増加し児童・生徒は5000人以上が学んでいた⁷⁾。しかし2008年のリーマンショックに続き、2011年3月11日の東日本大震災によって多くの在日ブラジル人が帰国したことによって閉校した学校もあり、2014年1月現在では、認可校が45校、認可申請校6校の51校となっている⁸⁾。ブラジル人学校では、本国教育省から認可を受けてポルトガル語を用いて教科学習を行っているところが多いが、こうしたブラジル人学校に関しては、日本の正式な学校と認定されていなかった為、大学への進学問題などが指摘されてきた。しかし平成23年には文部科学省が日本の国立大学受験資格を得られる学校として「我が国において、高等学校相当として指定した外国人学校一覧」⁹⁾を発表したことから問題が少しずつ改善されつつある。

4. 調査対象A校について

今回、調査対象校として協力を得たのは、東海地方にあるブラジル人学校A校である。A校は日本人の理事長が2000年に私塾として開校した学校で、理事長及び事務&教員には日本人もいるが、授業での教授言語はポルトガル語で、教室や職員室でもポルトガル語が使用されている。A校はブラジル教育省の認可校であると同時に、文部科学省の「我が国において、高等学校相当として指定した外国人学校一覧」にも指定された学校法人となっている。同校のホームページによれば¹⁰⁾、児童・生徒数は幼児科から高校3年まで約250名が在籍している。入学定員は幼児科が12名、小学低学年が15名、小学中学年から中学までは28名、

高校が30名と少人数クラスで運営されている。年間授業日数は200日、年間授業時間は1080～1200時間で、科目は小学1年生からポルトガル語、数学(算数)、美術、理科、地理、歴史、日本語、英語、体育に加えて、補習(復習)や学級活動が組み込まれている。この他にコンピュータが小学校で選択でき、芸術、日本の社会、科学などの科目が学年が上がるにつれて加わる。教職員は26名で、教師はブラジル人12名、日本人4名、アメリカ人1名で小学校1年から専門教科を担当している。「愛情と思いやりをもった人間性豊かな国際人の育成」を教育目標として掲げているA校のブラジル人学校としての評判は高く、サンパウロ大学に進学した卒業生は20名を数え¹¹⁾、他にもサンパウロ州立大、ロンドリーナ州立大など有名公立・私立大学への進学者を出している。市内から通っているのは総児童・生徒数の約3分の1で、3分の2は市外から通学し、遠くは福井から片道2時間かけて通っている児童・生徒もいるという。教科書はブラジル私立学校の「SISTEMA MAXI DE ENSINO」を輸入して使用している。授業料は学年によって異なり、月額34,000円から38,000円である。ブラジルでの大学入試は11月から始まる為、高校3年生は10月末に卒業式を行い、授業は11月上旬で終えてブラジルの大学を受験する者の方が多く、日本の大学に進学する者は少ないという。

A校では、地域社会から孤立しないように日本の小中学校と交流し、日本文化を学ぶために遠足や修学旅行を実施している。またA校への入学・編入については、13教科のうち3教科の単位がとれないと受け入れないとの話で、他のブラジル学校同様、落第もある。

授業時間は9:00-3:00で、休みは、冬休み1週間、ゴールデンウィーク1週間、夏休み1週間である。学校施設としては、4階建の校舎の1階には1年生教室、多目的室、図書室、事務所、面談室、ランチルームがある。2階には職員室、保健室、教室(2年、3年、4年、5年)、3階には実験室、

教室(6年、7年、8年)、4階は高校1～3年と日本語教室、会議室などが配置されている。A校では体育館は市立体育館を利用しており、プールは近隣の企業プールを借り、子どもたちの通学は6台のスクールバスを使用して送迎している。ランチタイムは低学年と高学年で時間帯を分けており、ブラジルの食事が提供されていた。図書室にはポ



写真1. 図書室に配架された日本語の本

ルトガル語の図書だけではなく、日本語の歴史やマンガ本、英語の本などが置かれており、日本語能力検定N1の合格者の20名以上の名前が壁に掛けられていた。

4.1. 授業見学

A校での授業の様子を日本語クラスと英語クラスで見学させていただいた。見学したのは2013年8月である。



写真2. オレンジの木が飾られた低学年教室

4.1.1. 日本語の授業

小学校3年生の授業では、日本語で授業が行われており、くもん出版の『やさしいひらかな』をテキストに「ぎゅう」「びょう」などの書き方を学んでいた。またカレンダーを使った数字の読み方(つたち、ふつか、みっか)の学習をしており、宿題としては、「ぼくのいえ・わたしのいえ」が出され、一軒家やアパートなどの説明と共に「家の中を紹介すること」が課されていた。教室には、「こくばん」「ごみばこ」「いす」「ロッカー」「すいそう」「フラフープ」「そうじどうぐいれ」などの日本語で書かれたカードが貼られていた。

4.1.2. 英語の授業

小学1年から週2回の英語の授業を実施しているA校では、7年生(中学1年)は、ブラジルの教科書“ENCARGOS BIMESTRAIS”を使用して授業をすすめており、新出単語の説明(rain-rainy, boaring, what about...ing, guess)や、助動詞willの使い方、人称代名詞の目的格(I-me, he-him, she-her)の説明をしていた。例文もThe emperor was embarrassed because he was without his clothes.などが板書されており、小学校から英語の授業を実施しているだけに、日本の中学生1年とくらべると高いレベルの英語の授業が行われていた。英語の担当教師の話では、ブラジルの大学の英語の入試レベルが高いことから、本国よりも高いレベルの授業を行っているとの事だった。

4.2. 学習環境

筆者が訪ねた際は、職員室には授業課題の数学の問題の解き方を質問しに高校生が来室しており、校長や担当教員が熱心に説明をしている姿を見かけた。また朝の始業前の職員室では、子どもたちの通学状況の連絡や、個別の子どもたちの状

況に関する情報交換が行われていた。A校では、子どもたちは公立小学校や国内外のブラジル人学校から転入・転出するとのことであった。A校の子どもたちの学習環境についても質問紙による調査を行ったので結果を7.2で述べる。

5. 視聴調査

5.1. 使用映像について

視聴調査に利用した映像は、宮沢賢治原作のクレイアニメーション『雪渡り』（(株)ハリケーンフィルムズ：現/株式会社サイプラス）である。この作品は日本で制作された約14分の作品で、今回は英語版と日本語版を使用した。

作品の内容は、1.「プロローグ」では『雪渡り』の意味の説明がなされ、2.「森へ」で主人公（カンコと四郎）たちが森に行き、そこで狐の作った3.「雪だるま」を見つける。主人公たちは大人たちから聞いた狐にまつわる4.「教訓」を思い出すが、5.「狐との出会い」で狐の紺三郎と出会い、紺三郎から幻灯会への6.「招待状」を受け取る。約束の満月の夜に兄たちに狐の話を聞く7.「兄弟との会話」を経て、8.「不思議の森へ」出かけていく。狐の森で開催される9.「幻灯会①」10.「幻灯会②」を見た子どもたちは、狐から出された11.「お団子」を信頼の証として食べ、12.「お別れ」には皆で楽しく踊り、13.「エンディング」の13シーンとなる。

5.2. 調査実施時期と調査方法

視聴調査は2013年8月に4年、5年、6年、高校2年、高校3年を対象に実施した。A校では小学校から英語が導入されていることから、視聴調査は1回目に英語版を上映し、2回目は日本語版を使用してそれぞれ視聴後に質問紙で回答を求めた。質問紙はポルトガル語で準備し、調査時にはポルトガル語を話す教員に逐次通訳をお願いした。また視聴調査に際し、記録映像も撮影した。

6. 視聴調査結果

これまでの日米での調査結果と比較してその特色を把握するために、本稿では4年生の視聴調査結果を中心に報告する。

6.1. 小学4年生の描いた雪だるま

アメリカの調査では、子どもたちは『雪渡り』に出てくる雪だるまの絵を3玉で描く子どもが小学校4年で半数近く見られたことからA校でも同様に「今見た雪だるまを描いてください」と指示した。

図3はA校4年の児童A君が描いた雪だるままで、木の根元に現れた雪だるまを描いている。

図4も同じく4年生のBさんの絵である。A校では15名の4年生全員が2玉の雪だるまを描き、3玉の雪だるまを描いた児童は1人もいなかった。

また全員が雪だるまに葉っぱの「耳」を描いており、木の枝のような腕を描いている者も多かった。5年生、6年生、高校2年、高校3年生の描いた雪だるまも全て2玉だったが、高校2年と3年では40名中5名がマフラーをつけた雪だるまを描いていた。

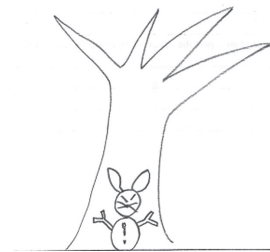


図3. A君の描画



図4. Bさんの描画

6.2. 「最も印象に残ったシーン」

「最も印象に残ったシーン」に対する4年生の回答を図5に示す。

1回目の英語版の上映後の子どもたちの自己申

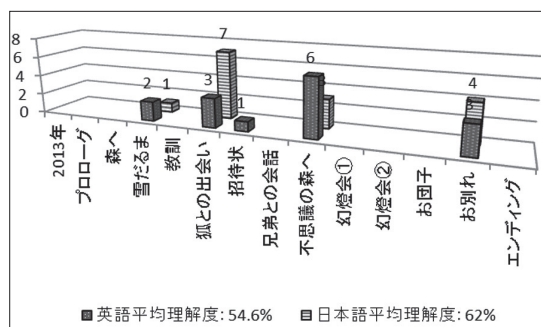


図 5. A校4年生の「最も印象に残ったシーン」

告による理解度は54.6%、日本語版が62%で、英語版と日本語版ともに理解度が50%を超えている。アニメ映像を見ることで理解しやすかった為と考えられるが、英語版より日本語版の方が理解度は高くなっている。英語版視聴後に「最も印象に残ったシーン」と回答したのは、「不思議の森へ」(6名)が最も多く、次いで「狐との出会い」と「お別れ」に皆で踊るシーン(共に3名)である。日本語版で「最も印象に残ったシーン」と回答したのは、子どもたちが狐の紺三郎と初めて出会った「狐との出会い」(7名)で、次いで「お別れ」(4名)となっている。

6.3. A校とアメリカ3小学校との比較

A校4年生の「最も印象に残ったシーン」の日本語版視聴後の回答を、2012年に実施したアメリカの3小学校4年生の調査結果と比較したものを図6に示す。

図6では各校の対象人数が異なることから(A校:15名、日英Bilingual Program校:24名、西英Immersion Program校:43名、私立校:34名)人数の多少が目立つが、全体の傾向は読み取ることができる。「最も印象に残ったシーン」の回答では、日本語と英語のバイリンガル校とは若干傾向が異なり、スペイン語と英語のイマージョンプログラム校やモノリンガルの私立校と同じような回答傾向がみられることがわかった。

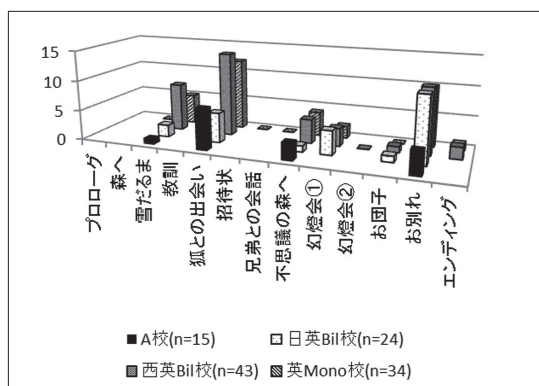


図 6. アメリカ3小学校との比較

7. 子どもたちの教育環境について

7.1. 先行研究

在日ブラジル人の教育に関する研究はかなり蓄積されつつある。日本の外国人学校に就学する児童については、就学義務がないことから生じる不就学・未就学の問題(宮島・太田 2005)や、日本とブラジルあるいはブラジル人学校と日本の学校への転校による教授言語や学校文化の違いから子どもたちが学年相当の日本語や学力を獲得できていない点(川上 2006, 川口 2005)、ブラジル人学校への就学を「帰国を前提にしたブラジル人学校を修了しても、現実には帰国せず、滞在長期化の割には日本語も話せない、いうならば中途半端な若者を大量に生み出す結果になっている。帰国しない児童・生徒にとっては、せっかく高額の学費を払いながら何のメリットもない」(佐久間 2006)といった批判や、保護者の教育への関心の薄さ、「日本人としての教育をうけないで日本で生きていくことの困難さ」(拝野 2010)などが指摘されている。ここでは、こうした問題を指摘される中、ブラジル人学校に在籍する子どもたちがどのような学習環境にあって、どのような文化を身にまといつつあるのかを、視聴調査に加えて学習環境調査と保護者へのインタビューから探った。

7.2. A校での学習環境調査の結果

先行研究で報告されているブラジル人学校に通う子どもたちが抱える問題をかなり意識してA校を訪問した筆者だったが、実際にA校で英語のクラスを見学した際には、A校の英語の授業レベルの高さが印象に強く残った。高校生クラスでは、視聴調査後の質問は英語か日本語できるように問いかけたところ英語での質問が続き、質疑応答を英語で行えるレベルの力をつけていることがわかった。そこで生徒に英語の使用機会について聞くと、「ネット上で情報収集する際には英語のサイトを主に利用している」との声が多く寄せられた。A校では、子どもたちは教授言語であるポルトガル語で学び、授業では日本語と英語を小学校から学んでいる。授業以外に日本語に接する機会があるかを小学生に聞くと、「テレビでアニメを見ると会話で内容がわかるようになり、クラスメートと話題になったアニメに関心を持ってマンガを読むと、日本語の字や読み方を覚えていく」と答えていた。子どもたちは学校教育の場だけではなくテレビアニメ、そしてマンガなどを通して日本語力をつけている様子が窺えた。A校の図書室担当のスタッフによると、生徒の中には図書室にある日本の歴史マンガを全巻読破した生徒もいるとのこと、言語面からだけでも実に多才な子どもたちの存在が垣間見えてきた。

そこで、子どもたちの文化的な生育・言語・学習環境をさらに詳しく把握するために調査を行った。

表2は、今回の視聴調査に協力してくれたA校4年生15名の子どもたちの生育環境・使用言語・将来についての回答をまとめたものである。表2の一番上が質問項目で、左から順に、「4年」：学年、「英語」：英語版上映時の自己申告による理解度、「日本語」：日本語版上映時の自己申告による理解度、「ポ日英」：ポルトガル語、日本語、英語のうち得意な順に番号で示した。表2の例えば1番の男児の場合、一番得意な言語がポルトガル語で、

2番目が日本語、3番目が英語となっている。

質問項目の「渡航時」：日本に渡航した時期、「通学校」：これまでに通学した保育園・幼稚園・小学校、「得意科目」：本人が回答した得意な科目、「授業理解」：学校の授業をどの程度理解しているかをa=よくわかる、b=だいたいわかる、c=余りよくわからない、で回答を得た。「帰国経験」：これまでブラジルに一時帰国したことがあるか、「両親言語」：両親と話す際に使用する言語、「兄弟言語」：兄弟と話す言語、「日本友人」：日本人の友人はいるか、「テレビ・ネット」：テレビやネットを見る時に使用する言語、「本」：本を読む際に使用する言語、「マンガ」：マンガを読む際に使用する言語、「進路希望」：卒業後の進路、「大学」：大学進学を希望しているかどうか、「進学国」：進学を希望する場合、日本かブラジルか第三国か、「働きたい国」：将来働きたいと考えている国、である。それぞれの子どもたちの回答で、ポルトガル語、あるいはブラジルが主であると考えられる欄を網掛けにしてみた。ポルトガル語が教授言語であるA校で学ぶ子どもたちは、当然ポルトガル語が得意言語だと予想したが、日本語が一番得意と答えた児童も3名おり、そのうちNo.4とNo.11は両親との言語が日本語とポルトガル語ということで家庭の中でも日本語が使用されている様子が窺える。親の日本語使用頻度が、子どもたちの得意言語に影響を与えているようだ。またテレビ・ネット、本、マンガなど子どもたちの情報収集の手段となる言語も日本語とポルトガル語の両方、あるいはいずれかに偏る児童とさまざまである。No.9のように両親や兄弟との会話がポルトガル語であるにもかかわらず、日本語を最も得意言語と挙げている児童もいる。またテレビ・ネットやマンガは日本語、読書はポルトガル語という児童もいる。表2を概観するかぎり、言語環境を決める要因は、日本生まれかブラジル生まれといった出生場所ではなく、両親や兄弟との使用言語や、テレビ・ネット、本、マンガなど情報収集の際に使う言語など多様な要素に影響されていることが見えてくる。

表 2. A校 4年生の学習環境と子どもたちの考える将来像

4年	英語	日本語	渡航時	通学校	得意科目	授業理解	帰国経験	両親言語	兄弟言語	日本人友人	テレビネット	本	マンガ	進路希望	大学	進学国	働きたい国
1 男	20	20	ポ1 日2 英3	日本	日公立保育園、4年～A校	体育	b	×	ポ語	ポ語	×	ポ語	ポ語	ポ語	×	他の国	日本
2 男	40	20	ポ1 英2 日3	ブラジル生まれ3年生(10才)で	幼稚園、A校	ポルトガル語(国語)	b	×	ポ語	○	ポ語	ポ語	ポ語	大学に行く	○	ブラジル	ブラジル
3 男	30	30	ポ1	4歳ブラジルから	日保育園・2年1校・3年～A校	美術	b	○	ポ語	○	日語	日語	ポ語	生物学者	×	日本	日本
4 女	80	100	日1 ポ2 英3	1歳	保育園1、S校2年、3年～A校	ポルトガル語、日本語、美術、地理	b	×	日&ポ語	○	ポ&日語	ポ&日語	ポ&日語、	大学・画家になる	○	日本	日本
5 男	100	20	ポ1 英2 日3	4歳	A校幼～1年生、	体育	b	×	ポ語	ポ語	○	ポ語	ポ&英語	科学者			ブラジル
6 女	0	0	ポ1 英2 日3	10歳	A校4年～	ポルトガル語	a	×	ポ語	ポ語	○	ポ語	ポ語	小児科医師	○	ブラジル	ブラジル
7 女	50	100	ポ1 日2 英3	日本生まれ	B校、S校、C校、A校4年～	ポルトガル語	b	○	ポ語	○	ポ&日語	ポ語	ポ語	大学に行く	○	ブラジル	ブラジル
8 女	40	100	ポ1 日2 英3	3歳で来日	日公立保育園、公立小1年、3年～A校	理科	a	×	ポ語	ポ語	○	ポ&日語	日&ポ語	大学へ行く	○	ブラジル	ブラジル
9 男	90	100	日1 ポ2 英3	1年生9歳	ポ語幼稚園、1年公立小、3年～A校	算数	b	○	ポ語	ポ語	×	日語	ポ語	エンジニア	×	ブラジル	日本
10 男	60	70	ポ1 英2 日3	日本生まれ	ポ語幼稚園、4年ポ小学校、4年～A校	美術	b	×	ポ語	ポ語	×	ポ語	ポ語	科学者	○	ブラジルと日本	ブラジル
11 女	100	100	日1 ポ2 英2	日本で生まれ	日公立保育園、小1年～3年公立小、4年A校	日本語	b	×	日&ポ語	日&ポ語	○	日語	日語	ブラジルの自衛隊の学校	×	日本	ママとおねえちゃん一緒に暮らす為
12 男	90	100	ポ1 日1 英2	4歳	日保育園、公立小1年、A校3年～	日本語	b	○	ポ語	○	日語			コック	○	ブラジル	家族がブラジルに居る
13 男	30	80	ポ1 日2 英2	日本生まれ	日保育園、ポ語小学校、A校	算数	b	○	ポ語	×	日語	ポ語		大学に行きたい	○	ブラジル	ブラジル
14 女	80	80	ポ1 日2 英3	日本生まれ	日幼稚園、1年～A校	ポルトガル語	b	×	ポ語	×	ポ&日語	ポ語	ポ語	大学に行く	○	他の国	他の国
15	10	10	ポ1 日2 英3	1歳、	B校1年、S校2年、A校4年	ポルトガル語	b	×	ポ語	ポ語	×	ポ語	ポ語	弁護士になりたい	○	ブラジル	いいえ

54.6 62

表2の内容をもう少し詳細に見てみよう。英語版と日本語版の視聴後の自己申告による理解度を見てみると、英語版については100%理解したと回答した者は2名、90%が2名、80%が1名となっており全体の平均値は54.6%である。一方、日本語版を100%理解できたと回答している子どもたちが15名中6名おり、80%が2名、70%が1名と15名中9名の半数以上が日本語版の方がよく理解できたと回答し、平均も62%と英語よりも平均値は高くなっている。英語と日本語の関連を見

ると、No.5は英語が100%と回答しているにもかかわらず日本語は20%であることから、日本語よりも英語の方が格段に理解できたと回答している。その逆に英語よりも日本語が得意で英語の理解レベルが低いのはNo.7、No.8、No.13の3名である。日本語版も英語版も理解度が80%を超えているのはNo.4、No.9、No.11、No.12、No.14の5名とクラスの三分の一は英語と日本語での理解が高く、日英のいずれかが80%以上がNo.5、No.7、No.8、No.13となっている。

言語的な視点から表2を見ると、4番と11番目の児童については、得意言語が日本語となっており、「両親言語」つまり両親と話す言語も日本語とポルトガル語の両方であると回答していることから家庭環境に日本語がしっかり位置づいていると考えられる。一方、得意言語が日本語と回答しているNo.9の男児については、9歳で来日しており、両親との言語も兄弟との言語もポルトガル語であるにもかかわらず、日本語を得意言語と回答している。No.9についてもう少し見ていくと、「日本人友人」は居ないと回答しているものの「テレビ&ネット」「マンガ」で日本語を使用していることから、メディアを通して日本語に親しんでいると推察される。勿論、子どもたちの状況を見ていくと、No.1、No.6、No.15ようにポルトガル語が中心となっている児童もいる。

将来についても聞いている。進路希望については「大学に行く」や科学者、小児科医、弁護士などが記載されている。進学先については、ポルトガル語の得意な子どもはブラジルの大学への進学を、また日本語の得意な子どもの場合は日本の大学進学を考える傾向がみられるが、進学先や将来働く国としてブラジルや日本以外を考えている児童も2名もいるのは注目される。こうした特徴は拝野の調査でも明らかになっており、日本とブラジル以外のマイアミといった都市の名前が挙げられていた(拝野2010)。ブラジル人学校の子どもたちは、杉村(2014)が指摘しているように「多様な選択肢のなかから進むべき方向を取捨選択して国境間を移動する人物像」を視野に入れた将来を考えている者がいることがわかる。

8. 保護者への聞き取り調査

日系ブラジル人の教育に関するこれまでの調査では、保護者の子どもの教育への関心が低いといった点が指摘されることが多い。A校は私立であることから授業料がかかり公立校に通わせるよりも教育費がかかる。教育費をかけて私立のA校

に子どもを通わせる理由は何なのかを保護者に聞き取り調査を行った。インタビューに協力してくれた2組の保護者の話を以下にまとめた。

8.1. 保護者Nさんへのインタビュー

高校1年のN君のご両親に話を聞いた。父親は47歳、母親は40歳。結婚1年半の13年前にまず父親が単身で来日。日本にはすでに親戚がいたこととブラジルの仕事の給与が良くなかったことから来日を決意し、3か月後に妻と長男が日本に到着し、現在、父親は組み立ての仕事、母親は検査の仕事をしているという。A校選択の理由として父親のNさんは、「日本の学校では心配。奥さんが言葉がわからないし、学校は時間が長いから心配だ」と説明した。「私たちは土曜も仕事があったから」と長男は土曜保育、朝食などの給食つきのブラジル人学校に2才から5才まで通わせたそうで、月謝は5万5千円だったという。父親のNさんの生家では、両親は日本語で話していたがNさんはポルトガル語で返事をしていたという。ブラジルでは私立で英語を学び中学では毎日英語の授業があったということで、インタビュー後半は英語で答えてくれた。Nさんは来日直後には英語を話したが、職場で英語が通じないのでポルトガル語を話しているという。N君の母親も「来日したばかりは日本語を勉強したが、仕事場は皆ブラジル人だから日本語は今はいらない。市民病院も市役所にも通訳がいるから」と話す。

子どもは来年からブラジルの大学へ行かせたい、本人も外交官になりたい、と話しているという。Nさん夫婦は「私たちにとって、息子が一番大事。子どもの教育のために日本で働いている。息子は今、A校に加えて英語と日本語の学校にも行かせるためにあと2万円使っている。大学でdiplomaを得るために今、ちょっとガマンしている。子どもは1人だから大丈夫。子どもは勉強大好きね。日本語と英語の勉強も好き。ブラジルも私立の学校の授業料は高い。多分、今と同じ位かかる。サ

ンパウロのいい学校はそれ位する。いい大学にいいけばお金はかからないから・・・他の人は考え方が違うだろうけど、うちの子は勉強が好きだから息子は大学に行ったら大丈夫。家では日本語をしゃべらないので、ポルトガル語で話せる学校を選んだ」と話す。

8.2. 保護者Fさんへのインタビュー

高校1年のY君と小学校6年のK君の母親Fさんに話を聞いた。Fさんは現在企業の通訳担当者をしているということでインタビューは日本語で行った。Fさんはブラジルでは銀行に勤務していたが知人に誘われて旅行気分 で 1990 年に 22 歳で来日し、ご主人と出会って結婚したという。ご主人は 1988 年に大学を中退して日本に来日し、現在 49 歳だという。長男は日本生まれで、1 歳の時にFさんが仕事に復帰するために日本の保育園に通わせた。長男が初めて話したのは日本語で、2 年程その保育園に通った。次男が生まれて 1 歳になった時はブラジルの保育園に移った。朝 7 時から夜 7 時までと保育時間が長いのが一番の理由で、保育料は 7 万から 8 万円だった。長男が小学校入学を迎える時期に、将来は日本かブラジルかで話し合った。この当時の長男は 7 割が日本語、3 割がポルトガル語だったが、Fさんのご主人が将来はブラジルで暮らしたいということで 2003 年にブラジルに帰国した。サンパウロに住んだがうまくいかず、1 年経ってから父親が単身日本に戻った。ブラジルに残ったFさんは、家族がバラバラになる暮らしは良くないし、子どもたちは 2 人とも男の子だからお父さんが必要だと考えて日本に戻った。子どもたちは小さい頃は全部日本語だった。2007 年に再び日本に戻りA校に通わせるようになった。父親はブラジルに帰りたいと考えているので、長男のY君の大学進学先はブラジルの大学を望んでいるが、本人は日本とアメリカの大学も含めて迷っているようだという。F君はブラジルの事は余り知らないの、かなり不安があるようだ、と話してい

た。Fさん自身は、日本語を日本の会社に入った頃に学んだという。Fさんの母親や祖父は日本語が上手だったし、Fさん自身は子どもの頃に日本語学校があったのでとりあえず行っただが、本格的に学んだのは最初に日本に来てからだという。日本に住んで 23 年経っているが読み書きは「やっぱり、難しい」という。日本人は外国人には優しいのに、日本人と同じような顔をしている私たちには「日本語がわからない」というと「馬鹿か!」と言われるので困るとも話していた。

2 家族の保護者にインタビューして浮き彫りになったのは、A校の保護者の教育に対する意識の高さである。インタビューで繰り返されたのが「ブラジルの私立の学校の授業料は高い。それと比べればA校の授業料が高いとは思わない」という点である。また、親と子どもたちの「ブラジル」に対する意識のずれ、つまり親にとって「母国」ブラジルも、ブラジル人学校で学ぶ子どもたちにとってはブラジルに「行く」ことになり彼らの迷いの気持ちも浮き彫りになった。

9. まとめに代えて

近年の急速なグローバル化の流れの中で、日本国内でも「外国につながる子どもたち」の教育問題がクローズアップされることが多くなっている。多文化化がすすむ教育現場では、言語理解が十分ではなくても内容理解が促進できる映像が効果の高い教材として認識されつつある。しかしこれまでアメリカで繰り返し行ってきた視聴調査の描画からは、映像理解にも文化の影響がみられたことが明らかになった。そこで今回は、日本にあるブラジル人学校A校の協力を得て、視聴後の子どもたちの描画に文化の影響が見られるかどうかを調査した。また同時に、子どもたちの文化的な学習環境を調査する目的で、学習環境調査と保護者へのインタビューも実施した。本稿では調査のうち、4 年生の結果を中心に分析・考察した。調査結果から明らかになった点をまとめると以下のよう

になる。

・A校では3玉の雪だるまを描いた児童はいなかった。

・視聴調査後の「最も印象に残ったシーン」の回答では、アメリカにある日米バイリンガル校よりも、アメリカのスペイン語と英語のイマージョンプログラム校やモノリンガル校と同じようなシーンが好まれていることが認められた。

・視聴調査では英語版と日本語版を使用したのが、英語版と日本語版ではいずれも50%以上の自己申告による理解度を示した。

・彼らの得意言語（ポルトガル語、日本語、英語）は子どもたちの出生地や通学した学校の種類のみならず、親の使用言語やテレビやマンガなどメディアの影響なども影響していることが窺えた。

・日本生まれかブラジル生まれか、といった子どもたちの出生場所と得意言語は必ずしも一致しなかった。

・テレビ、ネット、本、マンガなどメディアの文化の影響を吸収しながら育っていることがわかった。

・小学校4年生段階で、将来は日本かブラジルかといった二者択一ではなく、それ以外の国を想定している児童がいた。

・インタビューに応じてくれたA校の保護者は、教育を非常に重視していることがわかった。

本研究の主題とする文化の影響については、雪だるまの描画結果で検討したが、アメリカで見られたような3玉の雪だるまを描く児童生徒は一人もいなかった。これは雪だるまを3玉で描くアメリカ文化の影響は認められなかったと言えるだろう。その一方で高校生の描画には雪だるまがマフラーをつけているものが何点あったことから、こうしたイメージがどこからもたらされているのか、といった点も含めて今後考察を続けていく予定である。また子どもたちの描画ではこれまで同様、全ての子どもたちが雪だるまに葉っぱの耳を描いており、子どもたちの観察力の高さを改めて確認する形となった。今回の調査結果は調査対象者数が少ないことから一般化には慎重にならざるをえな

いが、今後さらに調査を続けて検討を行っていく予定である。

注

- 1) 法務省「平成25年末現在における在留外国人数について」<http://www.moj.go.jp/content/001127288.pdf> (参照 2014-11-10)
- 2) 学校基本調査 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/08/1324860.htm (参照 2014-11-30)
- 3) 文部科学省、「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査（平成24年度）」の結果について」2013年4月3日公表データ http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&tclassID=000001047825&cycleCode=0&requestSender=estat (参照 2014-11-10)
- 4) 2011-08-10 朝日新聞 朝刊 教育1
- 5) 文部科学省「外国人学校の現状について」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06070415/005.htm (参照 2014-11-10)
- 6) 月刊『イオ』編集部, 2006, 『日本の中の外国人学校』明石書店 p3
- 7) 月刊『イオ』編集部, 2006, 『日本の中の外国人学校』明石書店 p29
- 8) 拝野寿美子, 2014, 「地域共生世代を育むブラジル人学校—多文化共生アクターとして—」, 牛田千鶴編, 『南米につながる子どもたちと教育』行路社, 153-173、
- 9) 文部科学省, 「我が国において、高等学校相当として指定した外国人学校一覧」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shikaku/07111314/003.htm (参照 2014-11-10)
- 10) A校ホームページ: <http://www.ogaki-tv.ne.jp/~hirogakuen/> (参照 2014-11-10)
- 11) ニッケイ新聞 2014年1月8日: <http://www.nikkeishimbun.com.br/2014/140108-71colonia.html> (参照 2014-11-10)

引用文献

- 川上郁雄編,2006,『「移動する子どもたち」と日本語教育』,明石書店
- 川上郁雄,2013,「移動する子ども」学へ向けた視座—移民の子どもはどのように語られてきたか,川上郁雄編『「移動する子ども」という記憶と力—ことばとアイデンティティ』くろしお出版
- 川口直巳,2005,「来日ブラジル人児童生徒の教科学習内容の理解状況—ブラジル人学校での調査の結果から」,異文化間教育,21,p.32-43
- 佐久間考正,2006,『外国人の子どもの不就学—異文化に開かれた教育とは』勁草書房 p.107
- 杉村美紀,2014,多様化する「外国につながる子どもたち」と学校教育の課題,牛田千鶴編,『南米につながる子どもたちと教育』行路社,p.11
- 塚本美恵子・五嶋正治・岡田真弓・田中真奈美,2010,映像教材(アニメーション)を子どもたちはどう見ているのか—フォーマティブ・リサーチによる日米小学生の比較—,文化情報学,第17巻第1号,駿河台大学メディア情報学部,p.1-12
- 塚本美恵子,2010,日本語版アニメをアメリカの小学生はどう見たのか—質問紙調査の分析から—,日本教育工学会研究報告集,p.133-136
- 塚本美恵子,2011,アメリカの子どもたちは日本のアニメをどう記憶したか—子どもたちの描いた「雪だるま」からの一考察—,日本教育工学会講演論文集 p.811-812
- 塚本美恵子,2012a「アメリカの児童は”雪だるま”をどう描いたか」異文化間教育学会第33回発表抄録 p.90-91
- 塚本美恵子,2012b,子どもの映像視聴に見られる文化の影響—発達段階による違い—,日本教育工学会研究報告集 JSET 12-4,p.147-150
- 塚本美恵子,2013,子どもたちは何を見ているのか,日本教育メディア学会研究会論集 p.31-34
- 拝野寿美子,2010,『ブラジル人学校の子ども達「日本かブラジルか」を超えて』,ナカニシヤ出版
- 拝野寿美子,2014,「地域共生世代を育むブラジル

人学校—多文化共生アクターとして—」,牛田千鶴編,『南米につながる子どもたちと教育』行路社,p.153-173

宮島喬・太田晴雄編,2005,『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会

本研究は、科学研究費助成事業の課題番号25350349 研究代表者 塚本美恵子「映像メディアの教育課題向上に関する研究」の助成を受けています。

Cultural Influences When Children View Moving Images on Film

— From the results of a research survey: children's images on film and their learning environment at a Brazilian elementary school in Japan—

By Mieko Tsukamoto

[Abstract]

In the present age – often termed the age of the visual image – images are now widely used as a tool for understanding in the educational workplace. The results of an audio-visual survey conducted on children in both Japan and America support the idea that visual images are stored in the memory, but it has become clear that the images are reconstructed not only from immediate perceptions, but from cultural influences as well. The present paper examines Brazilian children residing in Japan – the greatest number of children with foreign ties – to ascertain whether or not they are influenced by their former cultural environment when viewing images on film. In addition, I take into consideration the results of this survey and also interviews conducted with parents regarding the children's learning environment.

[Key words] Anime, visual images, survey, Brazilian School in Japan, elementary school, comparative study